

日本労働年鑑 1951年版(第23集)

The Labour Year Book of Japan 1951

第二部 労働運動

第三編 農民運動

第一章 農業情勢の転換と農民戦線の分裂

第八節 全国農民大会と農代会議

一、全国農民大会の開催(一九四八・五・二五) 日農、全農、農青連、農地委員会全国協議会、農業復興会議等の諸団体の主催で、五月二五日東京都明大講堂において全国農民大会が開催された。議長に東畑精一氏を選び、税金、米価、生産資材の確保、協同組合組織の民主化その他全般的な農民運動の課題を議題にのぼせ、その決定をもって議会に押しかけ各党代表、政府側に決議文を手交し、また司令部関係方面に陳情し、つづいて農民大会実行委員会をもうけて二ヵ月にわたり運動を継続し、多くの成果をかちとることができた。つぎにその経過の概要を記述する。

全国農民大会宣言

日本再建の基盤は民主化の徹底と経済の復興にある。就中食糧の確保は其の大前提である。農民がこの重大な役割を完遂するためにいまいかなる措置が講ぜられているであろうか。農地改革は不徹底をきわめ土地を獲得した農民をしてその維持を困難ならしめるが如き事態が続発している。農業協同組合は当初の期待に反してその実質これに伴わず、自由なる運営は制約され、非農民的勢力のほしいままな跳梁を許容する傾向がある。

米価を始めとする農産物価格は一般物価水準よりはるかに低く、穀物価格差はいよいよ拡大し、供出割当は耕作の実体を全く無視して行われている。徴税は苛烈をきわめ税金査定の多くは不当にして画一的官僚的威圧を以てのぞみ之に加えて新税の重課を企てんとし、農民の拡張再生産への蓄積を根こそぎ破壊し、さらんとしている。農業金融は危殆に瀕し、農民は生産資金はもとより生活資金さえ枯かつし、これに融資の途は硬塞され、まさに恐慌状態にある。災害復旧は遅々として進まず、国家的与望をもって挺身した開拓者は孤立無援に放置され、拓地を放棄せざるをえない窮状におちいつている。

然し農民は日本の明日あるを確信し、あらゆる悪条件とたたかって増産運動をもりあげ、供出を果し、その負荷に耐えている。だがこれには自ら限度がある。

連合国の援助は日を迫って厚きを加えていることはわれわれの感謝するところであるが、わが農村の頭上には恐慌の暗雲が低迷し、日と共にその重圧を増大し、連合軍最高司令部より発せられた農民解放令は空文化し去らんとしている。

われわれは今春以来全国の農村ごとに農民の意思を結集し、今日ここに農民の生産活動を阻害し、最低生活を破壊する一切の悪政をはねのけ、農業をして国家自立の基礎たらしめようと決意した。本大会の決議はすべて働く農民の最低限度の要求である。われわれは経済復興に挺身する勤労者大衆との提携を一層強化し、農業の危機を打開し、以て日本自立への大道を開かんことを誓うものである。

右宣言する。

昭利二三年五月二五日

大会には全国各地農民代表千五百余名が参加し「不当課税は農民の増産運動を妨げる最大の掠奪である」「農家保有米を課税対象より除け」「納税団体交渉をみとめ税務署を民主化せよ」「第三次農地改革は焦眉の急である」「農地委員会の経費を増額せよ」「農協組に対する商工資本の支配圧迫を排除せよ」「天下り食糧検査制度を廃止して農協組にやらせよ」「パリティ米価をつりあげ適正なる農産物価格をきめよ」「肥料の適期配給を求む」等の諸要求が各代表より提出され、熱心に討議された。この大会に出席した芦田内閣の野溝勝国務相は農民代表の野次に会って降壇する等反政府の気配が濃化し、ついに森長崎県代表の「大会の全ての発言は現内閣に対する不信任だ。現内閣を倒すことがわれわれの要求を実現する前提条件だ」との発言で議場は混乱し、ついに内閣打倒運動の可否は大会実行委員会一任となった。大会終了後代表は国会において、社会党、共産党その他各政党代表に農民大会の意向を伝えて決議の実現に協力方を要望し、政府に対しては大会決議をつきつけた。

大会決議の実現のため日農常任大沢久明氏を委員長として実行委員会がもうけられ、翌日より五班に分れた委員は総理大臣、農林、大蔵、商工各大臣、各党、両院議長等に面会し、決議文を手交してそれぞれ実現方につき陳情、交渉を行った。

その後政府の態度は容易に要求をいれないため、実行委員会は本部を農業復興会議におき長期闘争の態勢をととのえ、さらに全国大会の決議を地方に持帰って各地方毎に具体的に運動をもりあげ再度農民代表者会議を開くこととした。また総司令部方面にも再度懇請陳情を行った。かくて六月一〇日全国各地農民代表二〇〇名参集して全国農民代表者会議を開催し、政府の回答に対する態度を次のように決定した。

第一、米価問題については政府は大会の要求を拒否したものとみとめる。

第二、しかし運動の分散、焦点のぼやけることを防ぐため、米価課税その他数項の問題を重点的にとりあげ、これを決議として重ねて政府の正式回答をうながすこと。また実行常任委員会の組織や地方における農民大会の開催等により運動を全国的に組織的に展開することを決定した。なおこの日、衆議院ではさきの農民大会の決議に依って米価改訂に関する決議案を上程し可決した。

その後ほとんど連日実行委員は各方面と交渉し、また各地方に委員を派遣して農民大会を開催する等の運動をつづけ、政府に対しある程度の譲歩を余儀なからしめた。たとえば「徴税に当り農民の団体交渉権をみとめ、公選による所得審査委員会を設けよ」との要求に対し、政府は「四八年度以降の所得査定標準の作成については市町村や民間団体と相談し不当課税のないよう措置する」旨言明し、また「現行米価と推定米価との差額を農家に追加払せよ」との要求に対し、政府は「新パリティ方式を採用し、本年産米最終価格を決定し、これと旧米価との差額を農家に追加払する」ことを約束した。また「農業手形融資範囲を拡大せよ」との要求に対しては「農業融資は従来の肥料代金に限定されていたがこれを農薬、農機具等の資金にも適用することとし、その手続を簡素化する」と政府は譲歩した。そのほか農協組に対する課税の減額その他の要求について部分的譲歩をなさしむるに成功したのである。

この全国農民大会と実行委員会による闘争は、もともと農業復興会議を世話役として結成され推進されたものであり、その要求もかなり「富農的」なものと批判され、またかなり妥協的なものではあったが、しかし日農の分裂抗争による統一的全国的闘争の欠如しているこの時期においてはほとんど唯一の統一的農民運動でありその運動のすすむにつれ耕作農民の下からの要求に押されて運動も次第に反政府的となり、それはまた復興会議中心の運動の限界をこえんとする勢を示さえた。これはますます加重する資本の収奪に対して中小農はもちろん「富農」層もまた反政府闘争に向はざるを得なくなった客観的情勢のしからしむるところであった。

(全国農民大会に関する記述は主として全国農民大会実行委員会刊「全国農民大会運動誌」一九四八・八発行による)

二、全国農民代表者会議の開催(一九四八・九・二七) 日農、全農等、農業復興会議加盟の一〇団体主催のもとに、第一回全国農民大会実行運動休止後の新情勢に応じて、四八年度米価の決定、課税適正化、生産資材の配給確保等の重要問題を解決するため、四八年九月二七日全国農民代表者大会が開催された。各地の農民代表は約二五〇名、米価四、五〇〇円要求その他を決議し、折から開催中の経済閣僚懇談会に出向いて関係大臣と折衝し、そのほか供出割当、課税農業金融、協同組合問題等につき決議案を作成し、実行委員をあげて長期にわたり交渉を行うことを決定した。

実行委員会は三重代表小林慧文氏を委員長として八班にわかれ、翌二八日より一〇月二日までに各政党、政府各省に決議文を手交した総司令部関係当局にも陳情した。しかるに政府は一〇月二日石当り三、五九五円の低米価を決定発表したので実行委員会全体会議においてこれが対策を練り、物資配給、課税減免、単作地帯特別対策の実施を改めて政府に確認せしめ、別項の諸決議をもって改めて政府当局と交渉することとなった。

しかるにこの頃より昭電疑獄に端を発して芦田内閣の基礎は動揺し、西尾副総理の検挙、収容によって遂に内閣は総辞職するに至った。このため実行委員会の対政府交渉も休止のやむなきに至ったが、一〇月一九日吉田内閣の成立後直ちに再開され要請書と決議を手交して折衝を行った。

かくて一一月一六日には政府側の回答あり、代表者会議の決議を部分的に容認するものはあるが、なお多くの点において決して満足すべき成果ということではできなかった。しかし、ともかく米価、税金、農地改革等の当面する重要農業問題について、その運動の主導権はおおむね富農的妥協的分子によって握られたとはいえ、下からの耕作農民の強い要求に押されて、独占資本に対する全国的統一的闘争を組織したことは決して過少評価しえないものがある。政府、議会への陳情、交渉において、しばしば大衆行動は反政府的空気の中に行われ、労働攻勢と呼応して、芦田内閣の土台をゆるがしたことは注目されてよい。全国農代会議方式による全国的農民闘争の波は、翌一九四九年四月における会議において最高潮に達し、そこには農村からの代表者が広汎に参加し、農民収奪者に対する広汎な反対運動が展開されたのである。それについては後章に記述する。

日本労働年鑑 第23集／1951年版

発行 1951年1月1日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年2月15日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1951年版(第23集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
